

道東地域におけるクロミノウグイスカグラの地理的分布と倍数性調査

宮下朋美¹・星野洋一郎^{1,2}

1. 北海道大学環境科学院生物圏科学専攻耕地圏環境学コース

2. 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場

クロミノウグイスカグラは北方地域の有用な植物資源である。ユーラシア大陸から北アメリカ北部の寒冷な地域にかけて自生する小果樹で、北海道ではハスカップとよばれ栄養源となる野生植物として古くから利用されてきた。現在は北海道の特産果樹としてお菓子やジャムなどの材料に用いられている。日本では北海道に広く分布するほか、本州の寒冷地に自生することが知られているが、その遺伝的多様性についてはほとんど分かっていない。そこで、日本に自生するクロミノウグイスカグラの遺伝的多様性について倍数性の観点から調査を行った。

フローサイトメーター（細胞の核の DNA 含量を測定する装置：倍数性を判定することができる）および染色体数の調査から、国内には2倍体と4倍体が存在することが分かった。2倍体は道東に位置する釧路湿原、別寒辺牛湿原および霧多布湿原に分布し、道内のその他の地域および本州の栃木県日光市戦場ヶ原湿原の個体は4倍体だった。2倍体はごく限定した地域に分布し、4倍体は広い地域に分布することが分かった。

別寒辺牛湿原のクロミノウグイスカグラは広い地域に分布していたが、個体数はそれほど多くはない。この地域のクロミノウグイスカグラの倍数性は希少な2倍性で、その由来、類縁関係を探る上で非常に重要な地域である。